

2010 年度報告書（研究員）

氏 名	蛭原一平
職 位	短時間研究員
<p>研究概要</p> <p>近年、日本では中山間地域を中心として広く、野生動物による農林業被害や人身被害が深刻な問題となっている。その背景として、野生動物の生息環境の変化や狩猟者数の減少に伴う捕獲圧の低下などが指摘され、生態学的情報にもとづき、被害を軽減しうる地域個体群の管理のありかたや、鳥獣保護および狩猟に関する制度が論じられることが多い。しかし、これら農山村での狩猟活動は、地域的な慣行、取り決めにもとづき、捕獲儀礼などを伴いおこなわれてきた。そのため、野生動物との共存を考える上で、これらの制度といった公共圏のなかで、親密圏をいかに再編しながら狩猟（利用過程まで含む）を実践しているのかについて注目する必要がある。</p> <p>本研究では、現在、法定猟期においてイノシシを対象とした跳ね上げ罠猟が活発におこなわれている沖縄西表島を事例に、狩猟活動における再編過程について分析をおこなった。猟師たちへの経年的な聞きとり調査から、猟師たちは自身の猟場環境の自然認識やイノシシの行動予測にもとづき、罠の数や、慣習的に決められている猟場において罠を掛ける場所を年ごとに変えていることが明らかとなった。また、猟果が思わしくないときは、法定猟期が残っていても早めに罠を撤収させたり、罠を掛ける場所を拡大させたりはしないなど、大量の捕獲を志向しない行動も認められた。肉が販売され収入源となりうる現在でも、西表島では地域行事など、大勢が集まる場でのふるまい料理としてイノシシ肉を無償で供する猟師も少なくない。さらに、肉の販売をおこなわず、親族や友人間での分配のみをおこなう猟師も多い。このように、西表島では利用消費において地域共同体内での親密性が維持されており、それが上述したような猟師たちの狩猟行動や規範に結びついていると考えられ、今後の日本の他地域や、韓国など周辺地域での野生動物管理を考える上での重要な比較、考慮点であるといえる。</p> <p>以上の結果については、2010年9月にイギリスのヨークにおいて開催された国際シンポジウムで報告をおこなった。</p>	
<p>業績リスト（著書、論文、報告、その他に分けて主要なものを記入する）</p> <p>報告</p> <p>EBIHARA, Ippei 'The ecological characteristics of snare hunting of Ryukyu wild boar in Iriomote Island, the South of Japan', oral presentation, <i>8th International Symposium on Wild Boar and Other Suids</i>, 1-4 September 2010, Fera York, UK</p>	

